

コラム

水資源

長澤 榮治

水は、中東にとって石油や天然ガスなど豊富なエネルギー資源と比べた場合、貴重な希少資源だともいえる。中東地域の大半は、乾燥地帯・半乾燥地帯に属する。主要都市の年間降水量を見ても、カイロの24mmをはじめとして、リヤド119mm、バグダード123mm、ダマスカス176mm、テヘラン210mmといった具合であり、エルサレム410mm、イスタンブール678mm、ベイルート893mmなどは地域全体としてはむしろ例外に属する。また、世界の平均一人当たり年間水消費量は6750m³であるが、エジプトなどアラブ15カ国は1000m³未満の小消費国である。

中東の水資源は、(1) 河川水利用、(2) 地下水利用、(3) 海水淡水化に大別される。第一の河川水利用であるが、古代文明を育んだナイル川とチグリス・ユーフラテス川という大河など、国際河川の開発は国家間の対立・紛争の原因になってきた。ユーフラテス川の場合、上流国のトルコのダム建設は、下流国、とくにイラクの水不足や塩害の進行に深刻な影響を与えてきた。代表的なアタチュルク・ダム(1992年稼働)の貯水量487億m³に対し、シリアのタブカ・ダム(サウラ・ダム、1973年稼働)の貯水量は117億m³の規模にすぎない。

最近、問題になっているのはナイル川の水源開発である。現在、上流国のエチオピアが建設を進めている大ルネサンス・ダムは、貯水予定量が630億m³と言われ、これはエジプトの1110億m³の57%に及ぶ規模である。2014年末までに40%に建設が進み、2015年6月には第一段階が稼働すると言われる。このダムが稼働すれば、長年のエジプトのナイル川利用の特権的な地位に大きな変化が起きる可能性がある。河川水の

制約が大きくなる中で、エジプトが近年、取り組んでいるのが、水利組合の結成や灌漑水路の改修によって水利用を効率化する事業である。いわばハード面ではなくソフト面での対応といえよう¹。この分野では日本の貢献も期待される。

第二の分野は、地下水利用である。1960年代のエジプトの西部沙漠「新河谷計画」や1980年代のサウジアラビアの小麦自給化政策などで、化石水と言われる再生不可能な地下水を利用する大規模な計画が進行したことがあった。しかし、乱開発の問題があり、いずれも変更をよぎなくされた。現在でもエジプトの北西部沿岸開発(40年後に3400万人を入植)など地下水利用によるメガプロジェクトが構想されている²。

第三の海水淡水化は、湾岸地域で主要な水資源確保の手段として今後も発展の可能性が高い。日本企業もコストダウンなど技術面での貢献がさらに期待される。このとくに水資源が希少な地域で問題なのは、一部の産油国で水道料金が無料であり、節水の努力が妨げられることである。これは第6章で考察されているテーマであるが、電気料金の事例と同じく、経済発展と環境問題に対する影響は大きい。

¹ 長澤榮治『エジプトの自画像 ナイルの思想と地域研究』平凡社2013年を参照。

² ナイル川利用のメガプロジェクト、トシュカ計画については、竹村和朗『ムバーラクのピラミッド エジプトの大規模砂漠開発「トシュカ計画」の論理』風響社2014年を参照。